

## 鉄山（たたら）と日本刀―先祖のルーツを探る―

梶本 武邦

はじめに

平成二九年（二〇一七）六月開催の「たたら吹製鉄とその地域性」（県立歴史博物館）や平成三〇年（二〇一八）一月開催の「挑戦！たたらで鉄づくり」（県立考古博物館）を含め、私はたたら製鉄関連の講演会等を多数受講して自己研鑽に努めてきた。特に平成三一年（二〇一九）三月開催の「ひょうごの鉄生産と流通」（県立歴史博物館）の講演は興味深い内容であり、非常に印象に残った。講演で紹介された「たたら製鉄遺跡分布図」で梶本家の先祖が関わったと伝わる遺跡名（赤西、鍵懸、音水）が目につき、また、後述する山内職分が姓になった話から梶本姓の語源も再

確認出来たことで、先祖についての思いが一層強くなった。この結果、平成三一年（二〇一九）三月～令和二年（二〇二〇）一月までルーツを探る取組みを開始する動機となった。なお、私は研究者ではないため、本文中での専門的事項についての検討・考察・評価は避けることとする。

一、梶本家先祖は宍粟鉄山の専属鍛冶大工

（一）先祖のルーツの概要

まず、先祖のルーツを探る上で大きな手掛りとなったのが、父の手記「梶本家経歴卜林兵衛一代記」（昭和五三年／一九七八・父七三歳作）と、兄の手記「随筆集・冬の夜空」（平成四年／一九九二・兄五三歳作）であった。



自宅跡から滝谷鉄山遺跡方面を望む  
(波賀町)

年（一八七四）に  
廃山。これに伴い、  
梶本家は明治一九  
年（一八八六）に  
音水から野尻（現  
宍粟市波賀町）へ  
と移住する。父は、  
先祖からの伝来技  
術である鉄山鍛冶  
大工職を活かした  
野鍛冶職を祖父か

父の手記の文頭には、「梶本家先祖はたたら宍粟鉄山専属鍛冶大工で代々鍛冶清左衛門を襲名し」との記載があり、これは位牌と同一の内容の文言でもある。先祖の内三名は宍粟鉄山の三カ所（鍵掛、赤西、音水）で亡くなっており、墓石も各々の地にあつたことから、各地の鉄山を移住しての生活があつたと推測される。なお、一番古い先祖の命日は「文化一一年（一八一四）八月四日」と記されている。宍粟鉄山のうち、音水鉄山は明治維新における炭山の国有化の影響を受けて明治七



自宅に保有する鉄滓（金くそ）

を汲取り、先祖の  
ルーツを探る取組  
みに活用し役立て  
ることとした。  
なお、私の出生  
地は野尻（波賀町）  
であるが、この地  
域は一七世紀半ば  
以降から鉄山業が  
盛んな地である  
(図1)。兵庫県教

ら引き継ぎ、弟子入り修業を経て開業。戦前（昭和一九年・一九四四）にはその技術を一層発展・発揮することで、より高度な刀造りに方針を変え日本刀の美の世界を追求しようとした。その後、父は「日本刀鍛錬道場」（島根県）で修業し、後に刀匠「源善正」として生涯二〇数振りの日本刀を鍛錬し出展・奉納・寄進等を実施している。兄の手記には、父から引き継いだ日本刀とその関係遺産についての思い出と心の葛藤が記されている。こうした中、私は両名の手記を熟読してその思い

育委員会の分布調査 平成三年（一九九二）～平成五年（一九九三）によると、製鉄関係遺跡七九か所、鉄穴流し関係遺跡五一か所、合計一三〇か所が確認されている。

## （2）父祖伝来品等の保存管理の移管・依頼

先祖のルーツを探る取組みに至った背景には、四元号（明治・大正・昭和・平成）の世を生き抜いた父の没後から三〇余年経過し、合わせて兄弟姉妹が亡き後、その家族が所有する父からの譲渡品（父祖伝来・贈与品類）の「保存管理」を移管・依頼される事態が発生した事による。私の現状での認識・理解度では、子孫への引き継ぎにも不安が予想され、その危機感から対処策としてルーツの探索に至った訳である。

## 二、宍粟鉄山の昔と今

梶本家の先祖が直接に関わった江戸時代後期の文化一一年（一八一四）以降、明治初期に廃止となる音水鉄山（宍粟市波賀町）を含め、宍粟鉄山



森の上鉄穴流し場遺跡（千種町）



天兒屋鉄山遺跡（千種町）

について以下に記す。本来ならば墓石等で先祖の生活の営みが確認されている波賀町内のたたら製鉄遺跡（鍵懸、赤西、音水等）を訪ねるべきであるが、現状での遺跡の整備・保存状況を考慮して同市内の他遺跡七か所  
出石船着場（山崎）、  
安積（一宮）、  
小野段林（波賀）、  
荒尾・天兒屋・  
森の上鉄穴流し場  
（千種）・音水（波賀）  
は遠望する  
を、令和元年（二〇一九）の五、一二月に現地訪問した。

天児屋のたたら公園遺跡は、石垣郡によって整然と区画されていた。しかしながら、これ以外の遺跡は林道から荒れた小径から山中に入って（時には谷川を渡り！）石垣・屋敷・生活跡等を確認する作業となり、予想以上に肉体を酷使して大変であった。遺跡の大半は林中で枯れ落ち葉で覆われた状態であり、全貌は分かりづらい。しかし、先祖の鉄山生活の実態がこのような自然環境の中にあつたことを思うと、気持ちの高ぶりから疲れもなく気持ちの良い汗をかくことが出来た。

#### (1) 宍粟鉄山の歴史

良質な砂鉄・豊かな山林資源（森林・木炭）と生活用水に恵まれた宍粟の古代製鉄「たたら」の歴史は古い。岩野辺（千種町）には「金屋子の神」（たたら神様）降臨伝説があり、また「播磨風土記」の和同六年（七一三）には、鉄の産地として敷草の村（現宍粟市千種町）と御方の里（現宍粟市一宮町）等の記述がある。また、嘉暦四年（一二二九）に備前長船の刀匠景光と景政が宍粟郡三方西（現宍粟市波賀町小野）で作刀した、と

銘に刻まれた国宝太刀も埼玉県立歴史と民俗の博物館に収蔵されている。

#### (2) 鉄山（たたら）の職分・工程・姓

「砂鉄七里に炭三里」と言われるように、製鉄で使用する木炭の消費量は多く運搬上の困難もある。このため、鉄山従事者は木炭地を求めて山谷を順次移動し、再び旧位置にまたはその周辺付近に回帰した。波賀町内の鉄山遺跡でも一八〇年間で鍵懸・赤西は四回、音水は三回選地されている。こうした中、たたら山内（仕事場と住居を含めた集落）では、四分業の職制組織（図2）によって生活が営まれていた。なお、明治五年（一八七二）の壬申戸籍（平民苗字必ず相唱える事）では、山内での職分名を過去帳の肩書や姓に使用することが多かった点が確認出来る。

① 鉄穴流し 砂鉄の採取と水路に砂鉄を含んだ土砂を流し、比重によって砂鉄の分離を担当 姓は切山、② 炭焼き 砂鉄溶解用の大炭、大鍛冶用の小炭を焼く担当 姓は釜本、③ 炉場 炉づくり、鉄吹き、鋳出しを担当 姓は村下・炭坂・番子・

手子、④大工場 歩鋤・銚を脱炭し延鉄にする。  
鍛冶大工 大工場の責任者で世襲制 姓は鍛冶・  
加治・加地・梶・梶本姓。なお、この事實は父の  
手記の文頭にある「梶本家先祖はたたら六粟鉄山  
専属鍛冶大工で代々鍛冶清左衛門を襲名し……」位  
牌・過去帳（文化二年・一八一四）に記と  
も一致している。

### (3) 六粟鉄山の終焉

明治維新時の大改革で製鉄用炭山が国有林に変わ  
り、数百年間続いて来たたたら製鉄の事業経営  
は困難と成り音水鉄山も明治七〇一年（一八七  
四〜一八七八）頃に廃滅した。このため、各分業  
の構成集団の鉄山村七二所帯（梶本姓一〇戸）約  
四〇〇人（現在五所帯九人）の前途は死活問題と  
なり悲惨な事態となった。鉄山廃滅時以降、仕事  
を求めて各地へ分散し始め、他鉱山（生野・明延）、  
炭焼き、野鍛冶……と転職・転出・移住した。稼業  
繁栄した鉄山跡は現在祭祀者も無く、多数の墓碑  
群が遺跡となり哀れな状況である。こうした中、  
梶本家は明治一九年（一八六八）に野尻に移住し、

野鍛冶を営業する。

### (4) 移住後の家業のその後

明治一九年（一八八六）、曾祖父（四一歳）は  
家族（七人）と共に野尻に移住、先祖伝来の鍛冶  
大工の経験・技術を活かして野鍛冶（農具・包丁・  
林業道具等製作）を開業し生計を立てた。明治二  
四年（一八九一）九月に曾祖父の病死（享年四六  
歳）、祖父に引き継がれた家業は順調で母屋を新  
築（二階付き）し、周辺の杉山・田畑も購入して  
いる。大正一年（一九二二）四月、祖父の病死  
（享年五五歳）に伴い、父（一七歳）は親戚の勧  
めもあって伝来家業の野鍛冶業を継ぐ。大正一三  
年（一九二四）一二月から六粟一の秋田鍛冶で弟  
子修業し、途中約二年間の兵役も経て昭和四年  
（一九三二）八月に修業を終え、翌月から家業を  
再開（二六歳・弟子一人付）する。昭和一三年  
（一九三八）六月、昭和一六年（一九四一）二月  
は再度の兵役、復員後も太平洋戦争は継続中であ  
り、徴用が再招集かと不安な毎日を通り越したよう  
である。

三、伝統家業を活かした刀鍛冶への挑戦とその後

(1) 刀鍛冶修業と日本刀鍛造

父(三八歳)は昭和一九年(一九四四)二月に刀鍛冶への道を選択・決断し、日本刀鍛錬道場(島根県)の刀匠・初代川島忠善氏の下で修業、昭和二〇年(一九四四)一月からは、自宅で刀匠・源善正として鍛造する。日米講話記念刀(昭和二七年/一九五二)八月作含む。なお、昭和二〇年(一九四五)九月、昭和二七年(一九五二)四月の間、日本は連合国軍の占領下であり、日本刀



刀匠源善正(父・中央)が講和記念刀鍛造中の神戸新聞掲載記事(S27(1952).8.8付)

の製作は禁止させられた状態であった。以下については父亡き現状では確認出来ない疑問事項であり、これらは推測するのみである。

その一 父は何故、家族五人を残してまで勇気のいる刀鍛冶への道を選択・決断したのか？

経済的余裕有、野鍛冶と刀鍛冶との知識・

技術・工程の共通性、日本刀の魔力・魅力、

六粟鉄と「播磨風土記」の歴史的記事の理解

その二 刀匠名の源善正は何に由来するのか？

源 源頼朝・武家政権(武士・刀)・日本刀の

黄金期、善正 実子長男 昭和一五年(一九四〇)二月病死(享年六歳)の名でありそれを偲ぶ。

(2) 鍛造日本刀の出版・奉納・寄進と現状確認

刀匠・源善正(父)は、その生涯に二〇数振りの日本刀を鍛造して姫路城天守閣内での「郷土刀展」への出版や神社(六ヶ所に二〇振り)に奉納・寄進し、御神刀として奉られている。私自身も贈与・移管された日本刀一〇振りを保存管理しているが、不思議なことに手入れを重ねるにつれてそ



梶本家伝来刀（上2口）と  
刀匠源善正（父）鍛造刀（下1口）

の魅力・魔力に  
引き付けられ、  
現地での訪問活  
動を行うことと  
した。

令和元年（二  
〇一九）三月  
九月に、奉納・  
寄進先の寺社  
（播磨国総社、  
御形神社、波賀・

野尻八幡神社、原不動御堂、仏祥山満願寺）を訪  
ねて保存状況と現品の確認、および手入れを実施  
した。奉納時期は三五〇六八年前であり、当時の  
感謝状署名者は生存せず世代交代した状況であつ  
た。しかしながら、先方の関係者（宮司・住職・  
自治会役員等）の前向きな御協力もあり、ほぼ健  
全な状態での刀剣類とわが子に会おうような感動  
的な再会の機会を得ることが出来た。

おわりに

この度の取組みで得た貴重な情報は、写真等を  
多用した形でデータベース化済み（例「奉納・寄  
進刀剣類の仕様一覧」他）であり、父・兄の「手  
記」と共に子孫に引継ぐ所存である。また、今後  
は先祖のルーツの一層の詳細解明に努めたい。あ  
わせて、未実施である父の刀鍛冶修業地（島根県）  
の訪問については早期に息子二人と共に実行する  
予定であり、その日が来ることを私は心から楽し  
みにしている。

参考文献

- (1) 兵庫県西播磨県民局「たたらふるさと西播磨」。
- (2) 鳥羽弘毅「たたらと村 千草鉄とその周辺」一九  
九七年。
- (3) 波賀町「波賀町史」一九八六年。
- (4) 田路正幸「播磨国宍粟郡における製鉄遺跡」（『ひよ  
う』歴史研究室紀要 第三号 二〇一八年）。

